一九六七年（掲載誌、発行元不明）

「能力測定」の課題と方向

矢口　新
日本生産性本部プログラム教育研究所長

能力をはかるなどということは恐ろしくむつかしいことである。つまりそれは人間を測定するということで、そんなことが簡単にできるのなら、人間はもっとよくなっているだろう。むしろ今までいろいろなまちがった測定をやって来て、そこに人類のあやまちの歴史が記録されているのではないか。そういう意味では、こういう壁にいどんでみることは、人類がより合理的な生活をつくりあげる道ともなるのである。

目的を手段の中に解消し

能力をはかるというと、すぐわれわれはいろいろな所で行なわれているテストを思い浮かべるであろう。学校の学力テストや知能テスト。また入社試験などにあらわれるテスト。適性検査もそれに入れてよいかも知れない。また国家検定として行なわれているいろいろなテスト。自動車運転免許のためのテストから、いろいろな技能検定、国家試験といわれるものまで。

これらはみな広い意味で能力をはかっているといえないこともないが、正しくはかっているかというと、これは問題である。正しいとはどういうことかまず問題であるが、それは常識で考えても、どうも問題はありそうである。

たとえば、自動車の運転免許のための試験に、交通法規のテストがある。これは何をテストしているのか。正しくは恐らく法規に従って正しい行動ができるかどうかをはかっていると考えてよさそうだが、テストがかりにできても、交通法規にしたがって行動する人間であるかどうかはわからない。わかるところもあるが、その辺は相当あやしいものだということは、誰も感じているようである。それでもやらないわけに行かないし、他によいテがなければ仕方がない、というわけである。

これは、かりに能力をはかれるとしても、実際にそれをやろうとするといろいろ問題があって、具体的にやろうとするとむつかしいということをあらわすことでもある。能力をはかるなどということは、やはり多くの人を対象としてやって、その区別をしようというためであるから、一人について何年もかかるというようなことでは、意味がない。

世の中のひずみ拡大へ

学校のテストなども、そういうところが多分にある。一時間とか数時間のペーパーテストによって、能力をはかることができるかというと、まじめな人なら誰でも首をかしげるであろう。

しかしなにせ大勢の人間がいるのだから、一人に何時間もかけ、それも一人ずつしかやれないというような方法のテスト、あるいは能力測定法では、実際の役に立たない。それで一せいにペーパーテストをやるということになるが、その結果が、やっぱり能力をは

かれたという印象を人に与える。

そうするとこんどは、それをうまく突破するための努力ばかりすることになると、妙なことになる。勉強するのは能力を開発するためであったのが、テストのためになる。そのテストは、名目上は能力をはかるということになっているが、本当は、ごく一部のことである。しかしそのために勉強するということになると、勉強することが本物でなくなる。こうして世の中がひずみをもって来るのである。だから、なんとかよりすぐれた方法は考えられないか、ということになって来る。

テストは気にするなといっても

実際のテストは、能力をはかるという言葉であらわすには必らずしも正しくないのである。学校のテストは、能力というような言葉であらわすには決してふさわしくない。方法がとにかく単純なのだから、そんなもので人間の能力をはかれる筈がない。

しかしそういうものが案外人びとには大切のように思われているのには、やはりそれなりの理由はあるのである。学校が社会の発展に役立つ人間をつくるのだというようなことが人びとの常識になっていて、学校でおそわったことをおぼえていればよい、そのおぼえていることをテストするのだから、テストは大切だ、という筋道で、多くの人が考えるからである。しかもその学校というところは、もっぱら教科書が中心で、機械を操作したり、物をつくったりするような教育は熱心でない。みんなもそんなことはやらないでもよい位に思っている。これは明治時代の思想なのだが、今でもそういう人は多い。

そういう雰囲気を土台にして、学校のテストがなされる。そしてそれが能力をはかっているということに考えられて、そのテストの成績がわるいと、能力の低い人のように思われる。どうも困ったことである。

学校の成績がわるくても世の中に出ては仕事をするなどということがよくいわれるが、そういうことがあるのは、あたりまえである。それでは学校のテストは気にするなといっておれるかというと、実際に能力が低いなどといわれるからやっぱり具合がわるい。気にしないわけに行かないのである。

能力主義を打出した会社でも…

この頃、能力主義などといわれるようになったのは、意味がある。学歴主義に対してそれがいわれているということを考えると、とくに興味深い。学校できめた能力ではない。実力で行こう、という考え方なのである。さきにのべたようなことがだんだん認識されて、もう少し合理的に考えようというわけであろう。

そこから、能力をはかるということが改めて問題になって来た。それではその方法はどうかというと、これはまだなかなかはっきりしたものはあらわれていない。ある会社で、能力主義で行く、そして何年かに一度テストをやる、という方針を出した。そのテストは学校でこれまでやって来たのと同様なものであろうか。その辺はまだ明らかになっていないが、そうだとすると、またそこに問題があらわれそうである。

記憶能力テスト不信の背景

大体これまでのテストは、記憶しているものを調べるというテストが多いのである。ところがそんなことは、能力といえるかどうか。記憶能力ということなら、電子計算機の方がはるかに記憶容量は多いのである。ついでにいうと、計算能力だって人間とはケタ違いの能力をもっている。

そういうことも、人間の能力についての考え方がかわって来た理由である。電子計算機というようなシステムが出て来たら、記憶す

ること自体は問題でなく、それをどう使うかを考えることのできる人間にならなくてはならない。そういう能力が必要だということになって来る。

現代の能力主義というのは、学校の中でいわれていたテスト能力主義でなく、新しい技術革新の時代に、具体的に人間のすることがかわって来た、そういう具体的能力があるかないか、ということなのである。

それを基準にして、能力をはかるということも考えられるようになったのである。

技能検定の方向を深めよ

具体的になにの能力というようなものをはかるということは、これまではあまり考えられなかった。知能検査とか、各種のテストはそういうこととはちがって、もっと一般的、抽象的なものをはかっているのである。学者の仮説があって、それをもとにして考えているのである。その一ばん根底にあるのは、社会というか時代というか、そういうもので、知識をおぼえるということを土台にして考えているのである。

具体的なはかり方という点で、面白いのはオリンピックの技能検定ではなかろうか。技能検定に限らず、オリンピック全体どれも、極めて具体的に、これこれのことについてどうか、とはかっている。

技能検定でも、実際に場を設けて、あるものを具体的につくるということをやってみて、それでしらべるのである。それによって、ある限られた部分のことではあるが、はっきりすることは確かである。こういう考え方は、もっと一般的に考えられるようになってもよいのではないか。

具体的な能力を育てて測れ

今のところ人間の能力を測るということで一番やらなくてはならないことで、しかも実現の可能性のあることは、オリンピック技能検定のような方向ではないか。できるだけ多く、できるだけ細かくわけて、人びとの能力がどこに特色があるかを明らかにすることは非常な意味がある。

何年か前に大学を出たから能力がある、などというのは全く馬鹿げている。具体的に何ができるかを、実際にやってみてはっきりさせるということが最もはっきりする。そういうことは、やる能力を、具体的にきめさえすればできるので、抽象的に、漠然と事務的才能とか技能とかといっていたのでは、だめである。

具体的に能力を細分化するというのも、実際問題としてはなかなかむつかしいことであるが、最近は、仕事のシステムの近代化で、電子計算機によるシステムに切りかえるというような分析が行なわれているから、そういうことを進めて行けば、相当なところまでゆける。職務分析とか、作業分析とかも、もっと本格的に行なう必要があるのである。

そういう体制になって来ると、実際の仕事の場で、やる仕事そのものをたえず測定することができるようになるであろう。それは、仕事が合理的に行なわれるようになり、人間の配置も合理的になって来るということではないか。そういうことが、職場の合理化にもつながり、人間もはじめて、人間らしさ、それぞれの人間が自分の能力をフルに発揮しうるようになるのである。

具体的な能力を育て、具体的な能力をはかること、これが能力の中心問題である。